只見ユネスコエコパークの自然とくらし

只見ユネスコエコパークは只見町全域と隣接する檜枝岐村の一部地域で構成され、総面積78,032haを誇ります。この地域の豊かで貴重な自然環境や生物多様性、それらをより所とする住民生活の関係性（下図）が、人と自然の共生の国際モデルとしてユネスコに認められています。

豪　雪

（豪雪が作用し、つくり出される）

（雪を克服し、活かすくらし）

自然環境・生物多様性

豪雪が育む景観
―「雪食地形」と「モザイク植生」―

只見の山々は、比較的もろい凝灰岩を基岩とするため、冬季の豪雪で山の斜面は雪崩でけずられ「雪食地形」がつくられています。

この急峻で複雑な立地環境の山々に、それぞれに適応したブナ林をはじめとした多様な植生が成立し、植生がモザイク状に配置されています。こうした景観は標高1,000m以下の山地帯では極めて珍しく、自然度の高い状態で残されています。

集落背後の雪食地形とモザイク植生

代表的植生のブナ林

豊かな生態系を象徴する動植物

変化に富む植生は、多様な野生生物の生育・生息を可能にします。豊かな生態系を象徴する大型猛禽類のイヌワシ、クマタカ、大型哺乳類のツキノワグマが高密度で生息するとともに、多雪地帯に生育する希少種ヒメサユリ、近年新種記載されたタダミハコネサンショウウオが見られます。

ヒメサユリ

ツキノワグマ

タダミハコネサンショウウオ

（くらしに必要なものを提供）→

←（適切な利用・管理）

住民の生活文化

只見の自然をより所とした生活文化

只見地域に人が本格的に住み始めたのは縄文期と考えられ、現在でも縄文文化（狩猟、採集、漁撈）を底流とする、集落背後の山から生活に必要なものを手に入れる生活文化があります。また、豊かな自然環境は良質な農産物の生産を支えています。

寒冷な気候で保存（ダイコンニュー）

乾燥ゼンマイづくり

伝統芸能（小林早乙女踊り）

山菜・農産物などの田舎料理

植物を使った編み組細工

様々な蜜源植物を利用した養蜂

豊かな自然が生み出す美味しい米

薪材利用（低炭素社会の実現）

こうした自然と人との関わりが只見の価値・魅力であり、これらの継承・発展させるための創意工夫、協力が求められています。